

『医心方』房内篇についての考察

嚴 善 昭

〔要旨〕東アジアの医学史において、房中術の内容を独立の一章として医学全書に編入したことは、『医心方』編集の最大特徴の一つとなった。独自の分類をもつ房内篇は、貴族の房内保健に貴重なアドバースを与えたであろう。また、女性を尊重する編集内容は当時の官僚制度、対等に近い男女関係などの影響を受けたものと考えられる。一方、房中術専門書が古くから日本に輸入されていたが、初めから房中術は方術とみなされず、一種の異国的性愛文化として受容された傾向がある。浦嶋子伝説の分析を通じて、平安時代の「色好み」と言われる文化形成の根底には、房中術専門書が一定の影響を与えたと示唆される。丹波康頼は、貴族社会の房中術に対する行き過ぎた認識を改めるため、懸命に房中術の知識を医学領域に取り戻そうとした編纂動機もあったと推測される。

キーワード——『医心方』房内篇、編集特徴、編纂動機、性愛文化、浦嶋子伝説

一、はじめに

古代中国を含めた東アジアの医学史において、『医心方』のような医学全書に古代房中術に関する内容を独立の一章（房内篇）として編入したことは、極めて珍しい試みだといえる。『医心方』はこのような構成上の最大特徴ゆえ、古代日本の貴族社会に大切にされてきたのみならず、医学界を含めて大勢の人々の好奇心を引き付け、宮中に秘蔵されながらも数多くの伝写本がつくられた。そして、一千年余りにわたって奇跡ともいえるほど散佚もなく、ほぼ完全に保存されてきた一因となったのではないかと考えている。医学の専門知識の有無にかかわらず、日本人には『医心方』全体よりその房内篇がよく知られているのも事実であり、房内篇は『医心方』の代名詞と言っても過言ではない。

『医心方』に対する評価は、時代の変遷や社会環境の変化によって変わっている。たとえば、房内篇が倫理、道徳及び風俗にもたらした影響は、一つの主要要因として社会的批判を招き、ときには明治政府のような権力の介入による発売禁止の騒動も起きた。しかし、オランダ医学が日本に伝来するまで、長い間漢方医学を中心に行われていた医療活動のなかで、貴重な医学全書として日本民族の健康と繁栄に『医心方』が果たした役割は、限りなく大きなものであろう。戦後まもなく、『医心方』（仁和寺本）が国宝に指定されている。房内篇の注釈本も多く刊行されているが、房内篇に関する研究はあまり見られない。本論では、房内篇を中心に置き、『医心方』における房内篇の役割、収録された条文や分類の特徴等を検討するとともに、編纂者を取りまく時代背景、社会環境、生活風俗と関連させ、広い視野から房内篇が編集された目的や動機等を考察してみたい。

二、『医心方』と房内篇

宮廷医官・鍼博士であった丹波康頼は天元五年から『医心方』の編纂に取り組み始め、二年後に完成したと同時に、

永観二年十一月二十八日に時の円融天皇に献上した。¹⁾『医心方』の編集に当たって引用された本は二百四部、収録された条文は一万八百以上にも及んでいる。最も多く引用された医学書は七世紀の『千金要方』で、一千二百七十三条である。唐代中期八世紀の有名な医学全書、『外台秘要方』から引かれた条文は、十条にも達していなかった。²⁾

『千金要方』と同じ三十巻からなる『医心方』において、医の倫理ともいうべき、巻一総論の「治病大体第一」篇(半井本、オリエント出版社)は、『千金要方』巻一「大医精诚篇」(影印倣宋本、台湾宏業書局)からの引用である。両書ともに婦人病には三巻、小児病には二巻、耳鼻咽喉科、風病、鍼灸、養生、食治などにはそれぞれ一巻を設けている。『千金要方』の構成などが、『医心方』の編集に大きな影響を与えたに違いない。『千金要方』養生篇には「房中補益第八」という項目が設けられているが、養生学の一部としてその内容も限られている。だが、現存する古代中国の医学全書に「房中術があるのは、『千金要方』が初めてである。一方、『医心方』では養生篇とは別に房内篇が設けられ、房中内容的をしほり幅広く収録されている。

『千金要方』房中補益第八に記述される房中内容は、主に四十歳以上の男子が房中術を修得する必要性を説いている。過剰の性交が健康を害するものとして、男子の異なる年齢層における適正な性交射精の回数を述べ、性交の禁忌や占星による子づくり等にも言及する。しかし、量的に『医心方』房内篇の十分の一にも満たず、しかも具体的な分類もなく、他人からの引用なのか、それとも自らの実践経験なのか、その出典がほとんど明記されていない。『千金要方』を著した孫思邈は有名な道士でもあったので、房中補益篇の内容には神仙道教の影響が強く、道士たちの実践経験も紹介されている。³⁾しかし、房内篇には道教と密接な関連がある「存思丹田」の房中術や、占星求子術等が収録されていない。

日本では『医心方』より百年余り前、菅原岑嗣らが詔勅によって撰述した『金蘭方』五十巻が、同じ『千金要方』を真似て編集したものと推測されている。⁴⁾丹波康頼は『医心方』の編纂に当たって『金蘭方』の内容を熟知し、その編集

方法などにも強い関心をもっていたであろう。結果的に『金蘭方』は存続競争のなかで淘汰されたが、勝ち残った『医心方』に、房内篇の存在は大きな役割を果たしたと考えられる。今まで収集されてきた五十数種類以上の『医心方』写本は八群に分けられ、平安末期、鎌倉前期、室町期、江戸中期や末期にそれぞれ書写された写本が確認されている。このように人々の手によって次から次へと書写されたことは、『医心方』への愛着心にはほかの医学専門書にない魔力が秘められているからであると言わざるを得ない。

『医心方』房内篇には『彭祖經』『玉房秘訣』『洞玄子』『玉房指要』などの房中術専門書のみならず、筆者の集計では、医薬・養生・宗教などの經典を含む二十三種類の古代書籍から、房中に関する百五十以上の条文が集められ、三十項目にわたって類別されている。引用条文の典故がすべて明記されているので、中国で早く失われてしまった隋唐時代の房中術の内容を知るのみでなく、それによって房中術専門書がある程度復元することもできる。清朝末期の楊守敬は古代房中文化の存在を中国に知らせ、葉德輝は日本からそれを逆輸入し、房中術書籍を部分的に復原して出版した。

ことに二十数年前、湖南長沙の馬王堆漢墓から出土した古代房中養生に関する文献の整理、解読等の研究において、房内篇は欠かせない参考資料として大きな役割を果たしている。したがって、この房内篇は、『医心方』の存続に重要な役割を果たしたのみでなく、多くの房中術テキストを貴重な佚文として保存し、古代房中術及び隋唐以前の性愛文化などの研究において確実な貢献をなし、ほかの篇章に較べて遙かに大きな価値を持っていると言えよう。

三、房内篇の特徴

『医心方』房内篇は、多数の古代房中術専門書から、必要とされる条文を選択的に収集しながら、異なった理論の要点を引き出して、至理第一、養陽第二、養陰第三、和志第四、臨御第五、五常第六、五徵第七、五欲第八、十動第九、四至第十、九氣第十一、九法第十二、三十法第十三、九狀第十四、六勢第十五、八益第十六、七損第十七、還精第十八、

施瀉第十九、治傷第二十、求子第二十一、好女第二十二、悪女第二十三、禁忌第二十四、断鬼交第二十五、用薬石第二十六、玉茎小第二十七、玉門大第二十八、少女痛第二十九と長婦傷第三十という三十項目に類別したのである。

第一項目の題名は「至理」と名付けられているが、この言葉は当該篇の文中には見当たらない。『抱朴子』内篇・巻五は「至理」を題名とし、金丹薬を初め、房中、行気、服薬などの多様な仙道修行の方法を集めている。これらの方法で修行すればだれでも神仙になれると提唱する文章の冒頭には、「微妙は識り難し、疑惑する者は衆し」と記されている。この文から房内篇に「至理」を用いた編纂者の真意を理解するなら、重要なヒントが得られると思われる。遣隋使や遣唐使らによって日本に輸入された房中術専門書が貴族に広く読まれていたに違いないが、このような奥深い理論、かつ誤解されやすいテーマを改めて『医心方』という医学全書に一種の医学知識として紹介する場合、読者の注意を喚起するのみでなく、その重要性を再認識させる狙いもあつたであろう。

至理項では、男女の性愛は陰陽造化の原理に基づく高度、かつ微妙なものであり、体内精気の生成・蓄積及び、新たな生命の育みに重要な役割を果たす一方、女色をむさぼる者の身には、様々な病気を引き起こすと説いている。男女交接の技は、一時的快楽を求めるものではなく、肉体的、精神的な調和によって生活の質を充実させ、健康増進、老化防止ないし寿命延長に役立つ養生方法として評価されている。ことに政治を執り行う立場にある者に対して、節度ある性生活及び自己コントロール能力を修得することを促している。編纂者が生きていた時期には短命の天皇が多く、その原因については早期、かつ過剰な房事によると指摘されている⁶⁾。彼らの生活実態を目の当りに見てきた丹波康頼は、朝廷医官として責任を痛感し、『医心方』に房内篇の取り込みを決意したのであろう。

房内篇は、このように房中術の原理から始まり、房中術のもつ多様な役割を明らかにすると同時に、男女性愛における心の準備、精神と肉体の完全調和を重要視すべきことを詳しく説明した上で、精力の維持方法、適正な射精回数、過剰性交による副作用、子づくりのための性交日や場所などの選択、機能衰退の治療及び性交中生じる疾患に対する応

急措置等を説いたものである。そのなかには、現代医学や運動科学などで実証されたものや自然法則に従う合理的なものも多いが、根拠のない推測、迷信と思われる内容も多く存在している。関連する研究成果を改めて報告するので、ここでは全ての項目を紹介せず、いくつかの特色ある項目だけを取り上げて、時代背景等に関連させながら説明を行う。養陰を単独の項目として立てたことは、一つの大きな特徴であり、男尊女卑の封建思想に麻痺した中国人にとって簡単にできることではない。「沖和子曰」から始まる『玉房秘訣』の条文では、女性の房中術による養陰効果は、男児の出産、美容、病気の予防、健康増進、寿命延長などであると説かれているが、成功した例として夫を持たない西王母が挙げられた。西王母は名前の通り中国籍の女性ではなく、遠い西方からきた女神らしい。『玉房秘訣』の著者はこの極めて稀なケースを取り上げて説明しながら、女性たちが西王母を真似することを恐れ、「是を以て世教を為すべからず」とくぎをさした。しかし、編纂者は敢えてそれを立項し、関連資料を集めて進んで公開した。

『医心方』の編纂者が女性にかかわる房中術の論説を探し出し、養陽と養陰を並立したことは、異文化への理解の相違ではなく、当時の貴族社会における女性の地位に深く関係していると示唆される。西王母の神仙伝説は、『続日本後記』巻二仁明天皇に関する条文にすでに紹介され、貴族にとってそれほど珍しいものではなかった。八世紀から九世紀前半まで、ほとんどの貴族女性は夫の存在とはかかわりなく朝廷に出仕し、女官として官職につき位階を得たので、男性と同等に公的家が設置され、中下級官僚や雑色が家政機関成員として国から支給された。房内篇の編纂者は医官として当時の朝廷内外の実状や貴族の男女関係等を無視することができなかつたであろう。十一世紀に入って貴族層女性に禁欲生活が強制されていくと言われているが、古代から平安後期に続いた対等な男女関係、性愛観は、房内篇の編集に大きな影響を与えたと考えられる。

玉門大、少女痛及び長婦傷などの諸項では、老女の性愛や少女の結婚から生じやすい性器の疾患については、関連する原因や治療方法を詳しく説いている。これらは古代中国の医学書では、ほとんど一般の婦人病に分類されている。

中国人のそれらを医家に限られた専門知識とする考え方に對し、『医心方』の編纂者は房中術と直接かかわるものとして房内篇に収録し、貴族に広く知らせようとする意識があつたと思われる。これは単なる臨床分類の相違だけでなく、女性の精神的、肉体的な苦痛を理解しない限り、そのような発想が出てこない。さらに、至理項の『千金要方』房中補益から引用した四十歳以上の男性が房中術を修得する必要性を強調する条文で、原文のほぼ中央にある「所以彭祖曰以人療人、真得其真」という露骨な表現が省かれていることから、女性を使って治病する真实性を疑うことよりも、女性を尊重する編纂者の意識が明らかである。

丹波康頼は、自分の古代房中術に対する見解を、自分のことばによつて全く説明してはいない。それにもかかわらず、この房内篇の収集内容や編集のかたちを通じて、彼の房中術を房内保健として懸命に医学領域に取り戻す熱意が感じられると同時に、房中術を医学知識として、当時の日本社会の実状に合わせて貴族たちに正しく再認識させようとする編集動機があつたのではないかと考えられる。しかし、女性を尊重する編集姿勢を見せながら、中国文化のなかで最も残酷、かつ羞恥すべき一つの負の文化遺産といえる、「多御少女」の房中術に對して批判もしないで紹介されたのは、まことに残念なことと指摘する必要がある。

四、房内篇成立の時代背景

中国の中央主権国家の政治を模倣し、律令制度を導入した古代日本では、父系制が成立しても慣習的な行為がなされる実際の生活現場においては、大和朝廷から南北朝時代までの長い時期が、母系原理が根強く残っていた過渡期で、平安中期頃までに婿取婚が主に行われて、女性はなお自主性をもち、社会的地位もまだ低落していなかった。⁹⁾恋愛や離婚の自由があり、男女の合意のもとに性愛関係がもたれた。少なくとも九世紀頃までは妻が夫以外の男性と結ぶ性的関係は完全に閉ざされたことがなく、女性の意志に反した強姦のような性的行為もなかったと指摘されている。¹⁰⁾十世紀の初

頭には、男女の性愛関係は、不平等な関係がすでに芽生えていたが、差はさほどなかったとも指摘されている。⁽¹¹⁾

このような対等に近い男女の性愛関係は、平安前期の現存最古の歌物語、『伊勢物語』にも現れている。その時代には社交的、おしゃれな感覚である「色好み」の風潮が栄え、より多い人を相手にして恋愛することが推奨されたらしい。しかも若い男女に限らず、老女の性愛にも非難されることがなかった。『伊勢物語』によれば、三人の息子をもつ老女が、情があり、かつ誠実な男に逢いたいとのことで、心優しい三男が情の深い在原業平に母の相手になってくれるように懇願したところ、業平はその願いを聞き入れて老女と共寝をしたという。⁽¹²⁾これは青年の光源氏が源典侍という還暦に近い老官女を愛人にした驚くべき行状とも合致する。⁽¹³⁾息子が他人に母との性行為を依頼し、老女に愛欲を許すといった当時の社会風俗は、房内篇の編集にも一定の影響を与えたであろう。

限りのある俗世の恋を超越して、女神との大恋愛が描かれる『続浦嶋子伝記』では、漁師浦嶋子は、海から釣り上げた亀が美女となつて、蓬萊仙山の神宮に連れられて行き、この仙女と結婚して幸せな夫婦生活を送っていたが、耐えられない帰郷の念で女神と別れた後、約束を守れなかったために再会できなかつたという。⁽¹⁴⁾伝記の内容は従来の伝説と大筋で一致するが、新婚初夜の夫婦の性愛行動に極めて官能的な描写が加えられている。「嶋子、神女と共に玉房に入り、(中略)玉体を撫で、緋腰を勤め、嚙腕を述し、綯繆や魚比目の興を盡す。駕同心の遊、舒卷の形、偃伏の勢、二儀の理に普会し、俱に五行の教えを合わす」と加筆された部分は、明らかに『洞玄子』などに示された性愛の前戯、房中の技法、性交の体位などを取り入れて文芸化したものである。⁽¹⁵⁾

浦嶋子、又は浦嶋太郎伝説の祖形と言われる最古文献として、『日本書紀』にわずかに二行、五十数字ぐらいの簡単な記事が見受けられるが、文末に記される「語は別巻に在り」という文から、別巻に詳しい伝説文があると示唆される。その後、『風土記』に収録される逸文「丹後国」浦嶋子伝説は、すでに一千字を超えて、伝承物語の原形を整えている。⁽¹⁷⁾それに基づいて詠われた『万葉集』の「詠水江浦嶋子一首」は、三百五十字余りの長歌としてさらに文芸化され

ている¹⁸⁾。奈良末期もしくは平安初期に成書したと推定される『浦嶋子伝』(新訂増補国史大系本『古事談』第一所収)は、神仙思想の知識を詰めた文学作品としてデビューした。ここでは浦嶋子を平凡な漁師とせず、仙女に見合う「地仙」に昇格させたのみでなく、道教の房中術が小説として文芸化された『遊仙窟』をふまえた字句表現があるとも指摘されている²⁰⁾。

『浦嶋子伝』に注釈と漢詩を加え、文学的な潤色を行い、さらに房中術の内容を大胆に書き込んだ『続浦嶋子伝記』という文学作品の誕生は、偶然な出来事ではなく、時代の流行をごく自然に取り込んだと考えられる。このような始祖伝承の古典伝説に官能的性愛行為を大胆に加筆した作品は、よほど開放的時代でない限り、社会的批判を受けずに今日まで残るわけがないであろう。伝記の末に醍醐天皇の延喜二十年庚辰八月朔日に成ったという自署によって、文学界では西暦九百二十年の作品と認められているので、『医心方』より半世紀余り前に完成されたものになる。さらに、『素女経』や『玄女経』などの房中術書籍が日本に伝来した歴史を考えれば、いわゆる平安時代の「色好み」と言われる文化形成の根底には、古代房中術の書物が一定の影響を与えたと推測しても不思議ではない。

五、むすび

献上された『医心方』に対して、医学の門外漢である天皇や貴族たちは、真つ先に房内篇や養生篇に興味を示したであろう。房内篇の独自性ある分類によって、房中術のもつ多様な役割がより分かりやすく説明され、貴族の健康に影響を及ぼす性生活において、医学の立場から貴重なアドバイスを与えたのであろう。また、房中術を男性専用のものとして、女性の健康にも同様にも有益になると提唱された。このような女性を尊重する編集の姿勢から、当時の官僚制度、社会風俗に現れる対等に近い男女関係および性愛観などが、編集作業に大きな影響を与えたと考えられる。

『医心方』の献上によって七十三歳という高齢の丹波康頼が手に入れた地位と名誉は、この書が貴族から大いに評価

された証だといえる。⁽²²⁾ところが、社会の発展や礼教の強化とともに『医心方』は房内篇を持つがゆえに医学經典の地位から次第に遠ざけられ、とくに近代では、売春街で春画や春本などと同列同種にこつそり売りひさがれていた。⁽²³⁾ときには社会風俗を乱す猥褻な書として当局から取り締まられたことさえある。近年でも、『医心方』房内篇は今日常識から懸け離れた当時社会の「色好み」という性的現象を支えていたという指摘もある。言い換えれば、当時の最新医学著書は、異常ともいえる性的風習を科学思想の面から煽動したのみならず、医学技術の面からもサポートしたことになる。

しかし、『素女経』や『玄女経』のような古代房中術専門書は、遣隋使や遣唐使らによってかなり早い時期に日本に持ち込まれたにもかかわらず、奈良朝や平安朝において仙人への憧れ、神仙となった伝説が数多く残されていて、房中術を不老長生の道術として仙道修行に取り入れた記述はあまり見当たらない。奈良時代から道教の民間への伝授が律令によって禁止され、方術を伝授する道士の渡来記録もない⁽²⁴⁾ので、房中術は初めから一種の異国的な性愛文化として受容されたと考えられる。『続浦嶋子伝記』に織り込まれた房内術に関わる表現の分析を通じて、いわゆる平安時代の「色好み」と言われる文化形成の根底には、房中術の書物が一定の影響を与えたと示唆される。朝廷の侍医という立場にあった丹波康頼は、貴族社会の房中術に対する行き過ぎた認識を改めるため、懸命に房中知識を医学領域に取り戻そうとした編纂動機もあつたと推測される。そして、類を見ない新しい医学全書が誕生したわけであろう。

参考文献及び注釈

- (1) 宗田 一 『図説日本医療文化史』四六頁、思文閣、京都、一九九三
- (2) 馬継興 『医心方』中的古医学文献初探 『日本医史学雑誌』三二卷、三号、三二六～三七〇頁、一九八五
- (3) 『千金要方』卷二十七房中補益第八では、「仙経」から「存思丹田」の房中術が引用されるのみでなく、道教の仙道修行と深く関わりのある「採氣之道」や「男女俱仙之道」といった房中術も推奨されている。性交中、屏翳というツボを押して射精を

抑制することは、作者の経験談ではないかと思われる。

- (4) 酒井シツ『日本の医療史』六八頁、東京書籍、東京、一九八二
- (5) 杉立義一『医心方の伝来』二六〇～三一頁、思文閣、京都、一九九一
- (6) 同上、二八三頁
- (7) 服藤早苗『平安朝の家と女性』二九頁、平凡社、東京、一九九七
- (8) 服藤早苗『平安朝の母と子』一〇三頁、中央公論社、東京、一九九一
- (9) 高群逸枝『女性の歴史』(1) 六四頁、理論社、東京、一九八八
- (10) 関口裕子『日本古代婚姻史の研究』(上) 一一七頁、塙書店、東京、一九九三。八世紀から十世紀までの帝の御妻との密通については、西山良平の「王朝都市の王権と《色好み》」『日本史研究』三六四号、一九九二を参照。
- (11) 服藤早苗『平安朝の女と男』九頁、中央公論社、東京、一九九五
- (12) 『伊勢物語』(六十三段) 一八三～一八四頁、小学館、東京、一九九二
- (13) 『源氏物語』(二) 四〇七～四一八頁、岩波書店、東京、一九九四
- (14) 塙保己一ら編『群書類従』巻一三五、平文社、東京、一九七九
- (15) 「抱女於懷中、于是勒纖腰、撫玉体、申嘸婉、叙綢繆(和志第四)、「叙綢繆、魚比目、燕同心、鴛鴦合」(三十法第十三)、「其坐臥舒卷之形、偃伏開張之勢、(中略)並会二儀之理、俱合五行之数」(至理第一)などは、房内篇に収録されている『洞女子』の関連条文である。
- (16) 『日本書紀』四九七頁、岩波書店、東京、一九八三。雄略天皇二十二年七月の条によって集計したものである。
- (17) 『風土記』四七五～四七七頁、岩波書店、東京、一九八四、に収録される漢文「丹後国、浦嶋子」によって集計したものである。
- (18) 『万葉集』三八四頁、岩波書店、東京、一九八四。「詠水江浦嶋子一首」によって集計したもの。
- (19) 重松明久『浦島子伝』一二七～一五一頁、現代思潮社、東京、一九八一
- (20) 福永光司『道教と日本文化』九八頁、人文書院、京都、一九九八

- (21) 直木考二郎ら編『日本古典文学鑑賞第二卷、日本書紀・風土記』四〇四頁、角川書店、東京、一九八一。重松明久『浦島子伝』一五一頁、現代思潮社、東京、一九八一
- (22) 宗田一『図説日本医療文化史』五二頁、思文閣、京都、一九九三
- (23) 伊沢凡人ら『現代語完訳医心方房内』七頁、芳賀書店、東京、一九六八
- (24) 中村真一郎は「色好み」の思想的背景」(『色好みの構造』第四章、岩波新書、一〇七～一一五頁、東京、一九八五)に「この今日から見ると、奇怪なまでに放縦に思われる性的現象が、当時の社会では、思想的にも科学的にも支持されていた、という事実を忘れてはならない」と述べた後、平安中期の二つの代表的な著書を挙げ、それぞれ貴族社会に及ぼした影響を詳しく論じている。思想的な代表作は、空海によって伝授された真言密教の重要な経典『理趣経』で、医学の代表作は『医心方』房内篇だったという。
- (25) 下出積與『道教、その行動と思想』二四三頁、評論社、東京、一九七一

A Study of the Chapter of Bonaihen (房内篇) in the Ishinho (医心方)

by Shanzhao YAN

In the history of traditional medicine in East Asia, corporation of the sexual art (房中術) as a chapter of the medical synthetic book, is one of the outstanding editorial characteristics in the Ishinho. The Bonaihen is an important contribution to the continuation of the Ishinho, and the preservation of the lost original source-texts of the sexual art. The editor drew the different main points from a lot of selected materials about the sexual art, and classified them into 30 items in the Bonaihen. With this original classification it is easy to understand the various roles of the sexual art. Therefore, the Bonaihen would have given the nobles valuable advises in their sexual life. Analyzing the characteristics of the classification, it is obvious that the editor has respected women. This standpoint was influenced by the bureaucratic system, regarding the relation of equality between man and woman in those days. Moreover, through the examination of changes in the literary work of Urajimago (浦島子), the sexual art was seen as a kind of sexual amusement from China, and it influenced the formation of the lecherous culture in the Heian (平安) period. Furthermore, it is estimated that Tanba Yasuyori wanted to change the wrong knowledge about the sexual art among the nobles in order to bring it back again to the medical domain.